第1部　各地域における東日本大震災
B　宮古地域
第3章　被災者の証言

米屋陽一

1　日立浜町

3月12日、日立浜仮設住宅で6名の方から話をうかがった。

□　芳賀房子さんの話

昭和13（1938）年生。日立浜町。主婦。平成27（2015）年

私は地震の時は実家（港町）にいました。最初はスーパーさ行ったったの。戻って来て、実家によってコーヒーを1杯ごっそうになろうと思って。そしたら、飲まないうちに揺れて、立ってもいられなくて座りました。

そして弟の車でターミナル（浄土ヶ浜ターミナルビル）まで上がってきて。車もそんなに渋滞していなかったもんで、スムーズに上がって来れました。しばらく車の中におりました。そして揺れが収まって落ち着いたから、二中の柔道場に避難しました。そこに5か月いました。

避難所でこのぐらいな（小さな）おむすびをいただいて。水も無かったんです。そして寒くて…。柔道の子どもたちの柔道着を借りて…。

8月、日立浜仮設住宅に移動しました。鍬ヶ崎小学校の仮設住宅でなくて、下にありますがねえ、ここ上がって来る時に。十何軒あります。そこに私はいます。

□　山根蝶子さんの話

昭和10（1935）年生。日立浜町。養殖業。

私たちは養殖漁業でしたんで朝が早くて。朝2時半にはもう主人は沖に出るし、私は作業場の方で準備して。それで2人だけで働いてる時だったもんで。朝飯なんかも食べないで仕事をそのままやるんですよね。

あの日はちょうど仕事が終わって家に帰って、朝飯と昼といっしょに食べて、その直後でした。ちょうどクミアイ（漁業協同組合鍬ヶ崎支所）という家があったもんで、「後片付けは後にして、先にクミアイに行って来るね、3時前にね」って、出はろうとした時に揺れたったんですけど。

「これは津波だから、とりあえず逃げなきゃね」って。その2、3日前にも、そういう大きな地震があったんですよね。その時から、いろいろ毛布から食べ物から車に積んだったんです。解除が出た時は、長くって家に帰る時間がずーっと遅れたったんです。そういう気持ちがあったんで、「とりあえず、逃げろ」っていうので、お位牌と私が持病を持ってるんで薬だけで。毛布も持たないで車でそのまま科学館（岩手県立水産科学館）まで行きました。

父さんは、「家を見て来っから、おまえはここを動くな」って。近所の若いお母さんと娘さんが、具合悪くしながら上がって来たもんで、科学館のライトバンをお借りして、そこで休ませて。私はまぶってらった(見守っていた)んですよ、その子どもと。だから、津波は全然見なかったんです。

そこに夫が帰って来て、「もうだめだ、家も無くなった」って言うんで。家がこう浮かんで流れんのを見たんだそうです。そしてから、科学館には電気も水も無くって。「パーク（ホテル）さんに行けば、電気もあるし水もいくらかあるから、ホテルの方へ行ってください」って言うもんで、パークさんのお世話になりました。だから私たちは、学校に行った人たちよりは、寒い思いをしませんでしたけど。

みんな同じ気持ちだからね。大っきいおにぎりは小っさくなってたり、冷たくなったりね。朝、男の人たちが仕事に行く前は、水汲んでくれるんだけど、日中になればやっぱしお婆さんたちも行って、それ汲み上げてね。立派なとこで、お世話になりました。

「お年寄りと子どもさんは、下の広間にお布団敷きますから」って言うもんで布団を借りて…。そこで1か月、お世話になりまして。その後、警察の方たちが入るからって、宮古の体育館に移動しました。そこで2か月、仮設ができて上がってきました。

（夫は）昭和8年の大津波の時、4歳でお婆さんにおぶさって、逃げた記憶があって。だからってね、みんなが逃げないうちでしたもんね。

みんなが道路に立って、海の方眺めてて、「どこに行く、どこに行く」って。「逃げるとこあんせー」って騒いで、そして逃げて来たんですけども。

（夫は）すごくがっかりして。今まで毎日毎日働いた体だから、もうあっちが痛いこっちが痛いで、歩くのもやっとでした。肩をぶる下げて、足を引きずってねえ、哀れなような格好で…。

それでも2階が流されてて、よその家の方にまた戻って来て、斜めになって息子夫婦の部屋が濡れてもね、瀬戸物とか鍋釜、そういうのを拾って、雪解け水で洗ったりしてねえ、それを爺さんと嫁さんとで、そういうのやってました。私たぶん腰抜かしたんでねえべか、ホテルから出られなかったから。

□ 佐臼節子さんの話

昭和17（1942）年生。日立浜町。主婦。

私は下の方に仕事に行ってました、ワカメの芯抜きに。地震が来てから、「こんなに揺れっから、津波が来っから、仕事やめて上がったほうがいい」って、近所の人たちから言われて、自転車で帰ったんです。十分もかからないね。

家はお父さんがちょっと体が不自由なので、仕事から帰って来てから。玄関に車椅子を置いていたんですよ。そして、定置網のすぐ前なもんで、まさか津波がつくと思わないで、「逃げべ」っつても、本人が「いい」って、逃げないんだもの。「いいから」ったって、置いて逃げる訳でもないし、一応薬だ、そんなのもリュックサックに入れて、逃げる前に作ったんだども。車椅子に入ってね。それで、着替えさせたりなんかして、ご飯があったのでおにぎりを作って。

そうしてる間に、津波が来てねす、濡れましたよ。玄関だけ開けといて廊下は開けなかったから、大丈夫でした。玄関から入って来たんですよ。下は全部だめでしたよ。昔の建物だったんでねす、通り抜けが良かったために、良かったんですよ。

町内の人が来てくれて、「ここにいっつうと、津波だから」って言われてねす。びっくりしてターミナル（浄土ヶ浜ターミナルビル）まで車椅子で行って、そこからパークホテルに連れてってもらいました。あったかいところにいて、布団もあったかいのにって。部屋さにもお嫁さんも呼んで来させて、そこで1か月いました。

朝ご飯食べてから、下りて行ってね、片付けたり何かしてね。薪ストーブがあったためにねす、油もあったからね、助けられました。昔からやっぱり薪ストーブ使って、今も使ってますけども。今は壊れたとこ直して、そこに住んでます。

昔から山水を使ってましたのでね、そっからやっぱりみんな汲みに来たりね、洗濯したりねす、あの山水に助けられました。水道は止まってしまって。昔は飲んだり何だりしたんです。ガッチャンポンプで汲んで、お茶っこ沸かして飲めばおいしくてねす。

□ 太古エイ子さんの話

昭和16（1941）年生。日立浜町。主婦。

私も山根さん、佐臼さんと同じで、パークホテルに避難したんです。避難の生活はいっしょなんです。あったかくて寒い思いをしないで。避難した当時は、24時間テレビつけて。ホテルは発電機があって電気が切れなかったんです。だから、大変なことが起きたんだなあと思って、テレビを見てました。

私は自宅におりました。夫が趣味の会に通ってて、「3時ちょっと前に帰って来るから。今日はおそばが食べたいから、おれが帰って来る時間に食べられるように、おそば茹でておいてくれ」って言われて、その時間に鍋沸かして、おそばが茹で上がって、水につけてザルに上げた途端にグラグラ来たんですよ。

それで、とてもじゃないが家にいられないで外へ出て、つかまってしゃがんでました。家はガタガタ、ガタガタものすごい音で揺れるから、とっても怖くて、私は家で1人だったんです。

そしたら、今度はみんなが、「これだけの地震が来たから、津波が来

るぞ、来るぞ」「逃げろ、逃げろ」って、がああ騒ぎ出した訳です。そいで、浜にサッパ船が出入りしている、魚を採る漁師の方がその辺にいたんです。その方たちもみんな、「これだけの津波が来るから、大変だから逃げろ、逃げろ」って。そしていっそくさに逃げたんです。

私は夫が来るのを待ってて。バイクで磯鶏に行っていたんです。そっから戻って来て、避難するために、その辺にあるすぐ食べられるパンとかお菓子とか水とかって、リュックに詰めて車に積んで、ターミナル（浄土ヶ浜ターミナルビル）の駐車場に上がって来たんです。そうしたら車がいっぱいいましたった。

そこからみんなで津波見てたんだけども、第1波っていうのがゆるく来て、「ああ、津波ってこんなもんか」って言ってたんですよ、私ら見たのはね。それぞれ場所が違うと、また津波の来かたも違うと思うんですけど。「こんなもんか」って見てたんです。今度、次の第2波っつうんですか、どんどん海の水が引いてって、海の底が見えたんですよ。

そうして来た津波が白い波でした。サッパは流される。ビジターセンターの中には水が入って来る。壊されたもんが、どんどん流れて行くの大っきいたって。油タンクのこんな大っきいのが、こんな高いやつが、流れてきました。私ら上からそれ見てたんです。

私は避難したから自分の家が津波に遭うとこは見てないんですよ。津波が引いてから家へ下りて行って見たらば、2階まで足の踏み場がないようにサッパは入ってる、壊されないけど家の中はめちゃめちゃで、建物は壊されないんです。だけど中の物はひどかったです。家に入ることもできないで、あそこら辺の物が入って来て、そんな状態でした。後は毎日パークさんに泊めてもらって、後片付けに下りて来たんです。

ところが、置く場所が無いんです、みんな濡れてるから、取っときたくても。片付けておく場所が無かったんです。家は2階まで津波が上がったから、畳も布団もタンスも冷蔵庫も洗濯機も、全部捨てました。家の骨組みが残っただけでした。何一つその位置にあった物は無かったです、みんなひっくり返って。うちなんか、トイレも流しも全部壊れました。全壊って言われました。

そいで、私もパークさんに1か月避難して、山根さんといっしょに、宮古町の体育館に2か月避難したんです。その間に、お家を直していただいて、大工さんもいない人もいなくて、すぐには直してもれえなかった。電気は無い、水道は出ないでしょ、だから家ん中で生活することはできなかったんですよ。

八戸（青森県）に兄弟がいるんです。朝5時に出て来て、（手伝ってくれて）泊まる場所がないから、夕方帰って行くんです。その後、何日も八戸から来て、手伝ってくれました。人を頼むっても人もいないから。（実家の兄弟は）海から遠いとこに住んでたから、自分たちは被害が無かったんです。実家から兄弟が来て、手伝ってくれました。

全部で3か月避難して、水も出るようになって、電気もつくようになって、何とかかんとか家の中を直していただいて、生活できるような状態になって、6月に避難所から出て、今は自分の家に住んでます。

私ら町内でも、1年に1回、避難訓練してます。津波の避難道路ってのがあって、この高いターミナルに上がって来るようになってます。パークホテルには、町内として2年ぐらい前に、もし災害が起きたらば、避難所としてお願いできませんかって、前もってお願いに行っておいたんですよ。そしたら、その時に快い返事をいただいたんです。観光客もいたんじゃないかな。

私らロビーとか会議室とか大広間とか、そんなとこに避難さしてもらったんです。食べ物も冷たいものでなくて、あったかいおにぎり、あったかい味噌汁でした。こっちの人がご飯炊いてくれて、そいで私らがおにぎりを作ってって感じで。食器洗うのも自分たちで。部屋の掃除とかね。そういうのは。「自分たちでできることは、自分たちでやってください」ってことで。みなさんから言ったんじゃないですか、お世話になるからって。だから、「できる方はお手伝いしてください」って。パークの時は、スムースにいったんじゃないかな。

そして今度別なとこ避難した時も弁当の配達になって、そんな大変な思いはしないで、2か月間、体育館の中に畳を敷いていただいて、

毛布とか寝具いただいて。私らはいい方でした、よその方から話を聞くとね。

うちの方の町内は犠牲者は1人でした。サッパ船見に行ったんだそうです、地震の後に、Hさん。自分は船をやってるもんだから、船が心配だからって船見に行ったんだそうです。そうして津波に襲われて、そのまんま帰らぬ人となってます。そういう方もいます。町内が2つに分かれてるから、こちらの方は話はまた別です。日立浜全体だと3人です。

□ **鈴木誠子さんの話**

昭和25（1950）年生。日立浜町。主婦。

私は自宅で美容院やってたんですよ。それでお客さんを町まで送って、帰って家に戻ったら地震があって、大っきいんで。私、津波っていえば見に行くタイプだったんです。それで、北海道の娘が、「大っきい津波が来るから逃げろ」って言うので。うちは津波に備えた家だったのね。下が水が流れるようになってて。北海道で大っきい津波がありましたよね。その時に、間を空ければ水が流れるっていうそういう家で、3階建てだったんですよ。

絶対うちには来ないと思っている訳。家の前がコンクリートの庭だったんで、波が来ても大丈夫っつう思いがしたんで。津波っていうのは、見に行くもんだと思ったけど。北海道で逃げろって言うから、とりあえずいつもだとここ来るんだけど、下を回って車で来たんです。私は実家が日の出なんで、日の出にいったん車を置いて、来る途中に空き地で津波が来たのを見たんです。来たと思ったら観光船が入って来て、わーっと言ったら土埃、そいでわーっという間に、さーっと引きましたもんね。

第三駐車場まで来て、まだ家があるから、下に行ってみる気だったのね。そしたら隣の人が、「行くな」って言われて。それで行かなかったんだけど、それでも家は残ってました。ただ空き地がいっぱいあったんで、水がこう回ったんですね。それで家がぶつかって壊れたけど。まあこの際、全部壊したけど。全壊にしてもらいましたけど。3階だから、上の方は水があんまり掛かんなかったけど。それでも家ん中は、みなさんが言う通りめちゃくちゃでしたし。今までにないくらいですね。

私は日の出の実家の方にいました。避難所にいる方が幸せだったと思います。実家に行って食べるのはあっても、お店に行っても何もない訳。そして、お水も1時間くらい並んで貰って来て、それもバケツに2杯。そいでトイレは水洗だから、学校（第二中学校）のそばなんでプールから水を汲んで。近所にリンゴ園があるんですよ。そっから水を貰いに行って、それで3か月くらい…。

1日に2回かな、市役所の人がポンプ持って来て、水を貰いに行くんだけど、1時間くらい待ってバケツでふたつ。それ飲むだけ。後はちょうど雪が降ってたんで、それを溶かして鍋洗ったりとかしたけど。だから、避難してる人の方が、同じながら良かったと思う。すっごい食べる物が無いのがいちばん…。

美容院がちょうど軌道に乗りかかった頃に、津波が来たんでもうゼロです。お客さんがけっこう亡くなってるんで、（再建は）とても考えに入れません。いいお客さん、何回も足運んでくれたお客さんが亡くなってるから。自分の身内は親戚の人が1人亡くなってっけど、それでも、それ以上にお客さんが亡くなった方が辛いですねえ。

たぶんこの沙織があるために、同じ被災者だけが集まってるから、遠慮が無くやってんだと思います。それで違う所に行くと、やっぱり被害に遭ってない人とは温度差があります。ここだと被災に遭ったねえって言うにいいけど、よそに行っては言えない。何か違いますよねえ。だから、被災者同士でなきゃわかんないとこがあるんじゃないかなと思う。今になってから苦しいですね。

津波の時はただ笑ってたね、みんな、ただ笑うしかなくって。今は苦しいですね。3年ぐらいから、みなさんがいろいろ仮設を出て自立するし、先が見えないから、自立できる人はいいかもしんねえけど。そいで、津波っていうのは、田老だけじゃないんですね、宮古は。鍬ヶ

崎も全滅なんで、それを言いたいんです。ほんとそれを言いたいんです。

□ **早野かづ子さんの話**

昭和24（1949）年生。日立浜町。主婦。

その日は家にいました。うち（夫）は移動販売してるもんで…。カレイの干物を作ろうと思って、午前中は仕事をしたんで、遅くなってお昼を食べて、少しテレビを見てゆっくりしてたんです。それでガタガタっと来て。あまりにひどかったのでコタツにつかまっていたんだけど、あまりにも長いんでお勝手から外に出たけども、外は外で家と家との間なんで怖くなって。

そしたら漁師の方が1人みえて、いっしょに海眺めてたんですけども。その時も早く逃げれば良かったんだけども、「はあ、来たね、こうで、ああで」って、ちょっと高台になってるもんで、漁師さんと2人で海を眺めてたんですよ。その方が最初はいっしょになって見てたんだけど、「なんか大っきいのが来るから、逃げた方がいい」って言われて、それから逃げたんです。

逃げたけども何を考えたんだか、履物を交換して長靴を履いて。家の裏はすぐ避難所っていうか、山手に向かって70何段の階段があるんですよ。そこに登らないで、すぐ後ろにあった擁壁に登って、そのフェンスにつかまって、それで助かりました。

階段に行けば、ずっと上まで上がってって、水に浸かんなかったんですけども。逃げたのが1歩遅かったんで、それでフェンスにつかまって背伸びをして、鼻のとこまで（水が来て）ぎりぎり、助かりました。その水はそんなに強い水じゃなかったんです。どーっとこう上がって来るような感じで。それで引っ張って行かれるっていう感じの水ではなかったんです。

眺めてたっていうのは、昭和8年の時も家のとこには津波が来なかった。「何かあったら、そちらに逃げればいいね」って、隣のお婆さんなんかも言ってたんで、だから大丈夫っていう気持ちがあったし、お爺さんお婆さんにも、「ここには来なかった」って言われてたんで、安心してたんです。それで逃げなかったんですけども、あまり強かったんで、それでその漁師さんの方と逃げて、どうにか命拾いしました。

そして、引いて行ってからも動かれなかったんで、そいから今度階段に登って、海眺めたんですけども。自宅は残ったんです。自宅の脇の2階建ての倉庫は流れて行って。そこの隣にあったアパートの2階の部分が、倉庫に上がって。そこにいたアパートのお婆ちゃんは助かりました。

家の倉庫、そいから車は流れて行って。それを上から眺めてましたもん。あの屋根の色はそうだから家だな、窓がそうだから家だな、と思って眺めてました。でも、波が来てどうのこうのっていうのは、海に向かって背を向けて、こうして立ってたんで、海の荒れてるのは全然見ないんですよ。

私んとこの真向かいの魚市場の屋根まで水が来てっていうの、そういうの全然見てないんですよ、テレビで見ただけなんですよ。その時は、水は冷たいとは感じなかったんですよ。流れてきた水は、そんなに黒いとかそういうのじゃなかったですよ。油も感じませんでした。臭いもきつくは感じませんでした。避難所はこのパークホテルでした。

移動販売で家の人は車で岩泉方面に行ってたんで。そっちの方が心配になって、連絡取りたくても電話は通じないし、そういうのが2日続きましたね。連絡しようがなかったんですけども。山道通って戻って来ましたったけどもねえ。

そん時は寒かったんで、2階まで水が入ったんだけども、いっくらか濡れない洋服があったんで、みんな脱いで取り替えて、風邪もひかないで。私の場合は、押し入れの高いとこに置いたのがいくらか濡れないであるんで、それを着て助かりました。

その後、家は全壊で壊しました。柱は何ともなくて家も良かったんですが。2階の方は水は上がったけども、障子もそのまんま閉めたまんまの格好で、何ともなかったんですけどもね。やっぱり水が上がったとこなんで、上まで来たしっていうんで、全壊して…。今、被災した前の所に準備してます。

2　熊野町

□　松下信子さんの話

昭和11（1936）年生。熊野町。お飾り屋。
平成26（2014）年8月11日、話をうかがった。

□　野田和子さんの話（途中の談）

昭和38（1963）年生。八木沢。主婦。信子さんの娘。

私ここさ嫁いでから54年になります。その前からうちの人とここのお爺さんっていうか父親とお飾り屋をやってたんで。それよりももっと古くからやっていたのかなあ。とにかく私で54年、子育てしながらね。まわりからは「お飾り屋さん」っていわれています。1年に1回の市場の出店というか市さ出て。やっとお得意さんのお客さんに町で会っても「お飾り屋さんだねえ、元気だねえ」なんていわれたりしますよ。お客さんは1年に1回だから、なかなか会うこともないからね。魚菜市場さ朝買い物に行けば、「お飾り屋さん、うちのも買ってって」とか、いわれるようになりました、お飾り屋の顔で。

次の代にね…、おっきい娘（野田和子さん）だども、一所懸命手伝ってもらっています。だから、私は託したいと思っています。絵は描いてました。家でやってっから子ども見ながらでも、まずできるからずっとやってました。うちの人だって、船さ乗ってたったから、船さ乗ってて漁がないときとか、切り上げしてから仕事するような感じ、結局内職ですよね。これを夫婦で継いで商売にっては、ちょっと生活が…。

描くのは春先から描いて、今月はもうお盆だり、休むどもねず、やっぱり手数だもの、手仕事だからうちの原画で。昔は全部手で描いたんだって。今は間に合わないため、原画もって印刷屋さんに印刷してもらって、あとはのり付けして、色付けして、順番にでかしていくんです。原画は黒の部分です。あとの色付けは全部やってます。時間はすごくかかりますよ。

一応縁起物だから、汚さないように気を付けて描かなきゃなんないため神経も使います。吟味して描かなきゃいけない。買うお客さんだって、神棚に供えるというためだから、きれいなのがいいもの。「お飾り屋さん、ここしみが付いてるよ」とかって、いわれることありますよ。大きな色絵は、1時間はかかるね。1色塗って乾かしてから次の色入れないと、和紙のため染みだりしてうまくいかないために、必ず赤さ塗ったら次乾かして、この黄色の色塗るとか順番に塗っていきます。

この絵は「お飾り」って呼んでいます。ちっちゃな鯛とか巾着とかね、そんなの描いたの貼ってる方もあります。年末、30日か31日あたりに大掃除してから貼るような感じですね。日のいい日とか大安とか、そんな日をみてね、たいていは、大晦日に入る前かな。ちゃんと掃除して、神さまのお札貼ったりとか、そしてお飾りを貼って、年取りを迎えるって感じですね。

お飾りは1年中貼っておきます。そして、新しい年を迎えるときに取り替えます。古くなったお飾りは神社さ持って行って焼いてもらうとか、自分の家で倉庫の方でお客さんが持って来たのを焼きます。

お客さんの好みもあって…。お飾りの形も、色もほとんど替っていません。この顔料っていうのは、粉になったのが顆粒になったような…、絵具とはまた違います。

これは1番大きいもの、1メートル80、「いっけん間」というやつで、絵柄はちょっと違うけれど同じお大黒、恵比寿さんで。その家の好みもそうだし、その家にかわりごとが無ければ、毎年同じのを貼るつう習慣があるんですよ。今はちょっと若い方の関係でくずれてるかもしれないけど、そいでもやっぱりそんな習慣があります。色違いも代々伝えられてきたものです。

その年に不幸があった家は、お飾りをしません。1年外して次の年にやります。あとはまず、四十九日、百か日が過ぎて、貼る方もあるけど。「家はちょっと不幸があってだめだったから、じゃあこっちにするかな」っていうお客さんあるんですよ。そのまま「前のと同じでもいいですよ」っていわれるお客さんもあるし。

このごろは気分転換で、「黒いの貼ったから、こんどは赤いのにするかな」っていうふうな、そういう流れにもなってはきているけども。

前は「これはこれ」とか決まった絵を買うし、「ここの絵がいいから買う」とか決まってらったけど、ちょっとずつ変わってきているようです。

（野田和子さん談）

何年か前に花輪という部落さ行ったとき、そこの家で「10年何にもなかった」って。「それだどもお飾り屋さん、なんか何にもねえのも、また同じのを貼りたいけどどうしたらいいか、落ちそうだ」っていうのね。「だからのりの効果がなくなったんだし、10枚分、何枚も貼ってれば重みで取れてくっことあるから、それは取ってお庭で焼いてね、また同じのを今年から貼ってはどうか」って。そんなことを聞かれるお客さんもあってね。

横浜の笠原商店という問屋さんが来たったんですよ。そして見てて、「ああ、いい顔してるなあ、かわいい顔してるなあ、怒こってねえな」っては、ほめられたことがあるんですね。それから、新聞記者の方が市場をこうざあーっと見て歩いて、「ここの顔が一番いいな」っていわれたこともあんですよ。なかなかそういってもらえないから、うれしいですよ。何十年も前ですけどね。

「震災に遭って流れたから、神棚は無くなったから、仮設（住宅）には神棚は無いからお飾りはやらない」と。そいでもやっぱり落ち着いて、2年ぐらいなったらいずれの仮設の住宅でも、「いっときは自分の家だから、せめてちっちゃいのでも貼りたいから」っつうお客さんもありましたった。でもやっぱり、なかなかうちらも、それはちょっと響いてます。

あの日、私はマッサージで接骨院から帰って来たんですよ、2時半ぐらいかな。お茶飲みしてたんだった、1人でねえ。それでねえ地震になって、たまげてとりあえずガス（栓）ひねったり、それから2階さ上がって。ここから少し海が見えるんですよね、家で。そしたら、いやあ、どうして風も吹かないのになんだか黒い砂煙が、こう押し寄せて来るんだもね。それが波だったふうだもんのう。そいでたまげて、下ささがって、熊野神社さ上がったんですよ。そしたら、みなさんもいっぱい上がってました。

私はああって見てました。そしたら、観光船だったのに気が付かなくて、私は県北バスだと思ったんですよ、観光船とバスと見違えて、何でこんなとこにバスが来てるのかなと思ったんですよ。そして、よくよく見たら観光船で、こう流れてきて、鍬ヶ崎の町さ上がったんだ、そんな感じでした。私いつもこっから見てれば、きれいな水色の海見てんのに、その日は黒くて砂煙のようなもんだったの、それが津波だったんだ。それはたまげました。

何だか揺れてたまげて、どうしたらいんだか、うろうろするのも変だけど、行ったり来たり行ったり来たり、1人だからどうしたってねえ。逃げようと思って、1回神社さ上がってって。それから戻ってきて、ちょっと寒かったから、上さジャンバーはおって、また神社に行ってみたらば、「仏さんの位牌がガタガタって、直してきたども」って、同級生がねえ。「そんだどもいつまでもやってられなくて、やっと神社の前まで来た」って。「波に追いかけられた」って。

津波は仮設の辺まで、あとは神社の鳥居が壊れてなくなって。もう、そうしているうちに、下の娘から電話がきたときは、そのときは電話も通じなくて、「どうした」ぐらいだけでねえ、だめだった。なんとか高台さあがったり、ここまで波が来なかったんで、まず安心しました。

私の実家が、ここから歩いて10分ぐらいんどこにあるんですよ。妹が比較的海岸の近くにいるんです、そいで車をこっち学校さ持ってきてて、そしてから避難しようと思っていたんで、したら「はあ、だめだ、波が来たっけに、行がねえけに」って、妹もここにいたったんですよ。引いた後見だら、もう小学校の校庭まで波がきて、そして車も水浸しになって、「まあ、どこさも行かれねえから」って、うちさ泊まって次の朝になってから、「うち見さ行こう」っつうことで、この辺から上がって国道さ出て、そしてまず何とか実家たどり着いたの。

屋根が見えたから、「ああ、大丈夫だが…」って下がったけど、行ってみたらもう、そんなに広い道路でもなかったけど、波に押されて乗用車が1台上がってたけど、うちの実家ももうすっかり波が入って、

おひなさまも片づけないまんま、「おひなさまみんな無くなったあ」って。全部はあ、お勝手もめちゃめちゃ。2階はそれでも波が上がってなかったども。冷蔵庫は倒れていて。

とりあえず2階さ上がって、着替えをいくらか持って、冷蔵庫にあるのを2人で大丈夫なのを分けてしょって、そして、こう山回ってまた来ました。だって、食べるのもないし、水もないし、電気もないんだもの。

それで、あの地震が来たから、水が必要だから、とりあえず使いの水でもいいけに、私は風呂さも水溜めて、そして今はバケツたってそんなにあるわけでもないしで、ボールにも水汲んで。ここはプールがあったんで、トイレの水はあそこから汲んで来て使いました。風呂の水も別に自分たちの風呂だから、食べ物には使わないけど、なにか洗ったりするのには、それでも使えてよかった。

水道も電気も1週間くらいかかりました。車で持ってくるけれども、なかなか貰いに行くのも大変だから。食糧はなんとか持ってたもんを、自分でまずやって食べて。その辺は困らなかったどもね、お米あったからご飯たいて、食べたけれども。それだからって、小学校の避難所さ行って、水だのおにぎりだって、それはだめだって、ねえ。

水道が止まったので、避難所の鍬ヶ崎小学校に水を貰いに行ったらば、「そこは避難している人たちの水だから、汲んでいっちゃだめ」っていわれて。ペットボトル持ってったんですけど、後ろからがあっていわれて。「えっーだめだ」って、私たちだって水が出ない。

確かに家流された人はもっとひどいけど、うちがあっても水も出ない、それは一緒だって思いながらも、何かだめなんだっていわれて、そんで1本途中だったのを持ってきて、「すいません」とかいって。今思えば、それはみんな同じだったんだけど、と思ったけども何にも言えないまま、だめだって言われれば…。「だめですよ、ここは避難所の水ですから」って。えーって思って。

（野田和子さん談）

私たちもあるっていうもんで、行ったの、お水貰えっからと思って、そしたらだめって、何ともならない。うち流された人は大変だったけど…。そんなこともあったしねえ。

でも、「こっちの家の方さ、早く水も電気も来たので、私1人でいるより来た方がいいよ」っていうから、娘の家に避難しました。

私は八木沢っていって、磯鶏から山手に入った方なので、津波も見ることもなく、こんなことが起きてるってことも知らないで。地震はたしかに揺れとか怖い思いしたけど、後で鍬ヶ崎の写真を見せられて、ひどいことになってんだけど、それがなんなのかがよくわかんなくて、写真見てもこれ何みたいな感じで。「津波でこうなったんだよ」っていわれて、「ああ、ああ」って。

（野田和子さん談）

立ってあったのが、電信柱が倒れていくのが見えて…。そしたら神社さ上がってったら、その家さ流された旦那さんが、「どれがうちの屋根なんだか」、「どれがうちの家だべなあ」って、屋根がくっついてっから、「うちの屋根はどんなだったか」、結局記憶してねえ。「ずっと押さってくっついて流れていくから、わかんねえ」、そんな旦那さんもおりました。

震災後は、自分たちは家があってこんなお飾りもあって、正月迎えんだものなあと、お飾りを飾ることができっからねえ、それがあるんじゃないですか。買う人は黙って買って。縁起物でお祝いごとでしょ、だからやっぱり自分たちだけ祝ってね、楽しい気分ってことでもないけど、やっぱりその辺が、震災に遭った人、流された人と流されない人とは、ちょっと気持ちが違ったがね。今は落ち着いて仮設にいる人でも、「神棚造ってみっぺ」っていう気持ちになったけど、初めのあたりはその気には全然なれなかったんですよ。

知っている接骨院の先生の家も流されたんで、「なあーんに、盆も正月もねえ」ってゆったって。だから、お客さん何にもいわないで買ってったもんね。少しまず、何となくそんなときでも、「うちでも貼りたいが、

どんなのがいいか」とか、「じゃあ、これ買っていくからやってくれ」って、そんなお客さんもいました。なかなかこれも、だからテレビ屋さんに、「どんな気持ちで描いてっか」っていわれても、「喜んで描いてます」ともいえないし…。「なくなって大変ですよ」ともいわれないし…。喜んではいられないし、そうかって、いつまでも沈んだ気持ちでもいられないし、早くいい年が迎えられるようにすればいいなとか。

馬も牛も豚もあるし、稲荷さんもおかめさんもあるし、ただお財布とか、お供え、山の神さまとか、スルメ、イカ釣りの船…。牛を飼ってる方は牛舎に貼るんです。玄関に貼ってる家もあります、牛の絵は。馬は今、昔飼ってらったからって買ってる方もあります。お稲荷さんは自分ちで神社祀ってる方。おかめさんはお勝手が賑やかでいつも笑ってるようにって、お勝手さ貼ってますって。みんなひっくるめてお飾りっていいます。

「お飾り市」っていいます。「お飾り買いに魚菜市場に行くすか」って。お父さんが亡くなったとき、私がお飾り屋さんの当番に当たったんですよ。本当に本当に、私もうちの人が生きてやってらったから、全然こうなんだよっていわれても、はいはいってだけなのに、それがこんだ自分の番になって、本当に弱りました。

山田の方では、「蓬莱屋（ほうれい）さん」っていわれんです。私も初めはわからなかったけど、これは宝が来るって描いてあったなあって思って。宮古、この辺はお飾り、お飾り屋さん。

震災を境にして数はちょっと減りました、私も。田老の方から、山田の方から来るお客さんもあったり、魚菜市場でチラシ出したりとか口コミで広まったりで。山田の人だね、うちまで訪ねてきてくれたお客さんもいました。この前、東京の方だって、「山の神さま欲しい」って、そんで2人いるのと1人のとあるって私いったの。そしたら「どっちだかな」って。「そんじゃあ2枚送りますか」って送ってやったんだ。

3　鍬ヶ崎上町

□　阿部勝久さんの話

昭和41（1966）年生。鍬ヶ崎上町。包装資材店経営。

平成26（2014）年8月11日、話をうかがった。

3月11日の津波の被害で、本店の建物は残ったんですけども、2階まで浸水しまして、会社の前に漁協さんの冷蔵庫があったんで、直撃というよりはまわってきた津波で浸水しましたが、中は全部ぐちゃぐちゃで、置いている在庫も全部だめになりました。

グループ補助金のグループの中に入れていただいて、ここを直させていただきました。もともと父が経営している会社でした。父が2011年2月の初めの震災の約1か月前に倒れまして、それで関係各位と相談した上で、急きょ父の会社から、私の会社に直して、3月から開業する準備をいろいろやってました。

当日も駅前の岩手銀行に手続き等で回ってまして。銀行の中で地震に遭いまして揺れがなかなか収まんないで、急きょ揺れてる最中に車で移動して、本店に戻ってきました。

変な話ですが、津波が来ないだろうではないんですけど、大なり小なり皆さんどっかにそういう気持ちが少しあったと思うんですよね。私もまさかと思いましたが、ただいちおう揺れが大きいので、ちょっとまずいんじゃないかと思って急いで会社に帰りました。

2時46分、その時は本店のメンバーは、たまたま全員3時の休憩に合わせて帰って来ました。私が来る前にみんな戻って来てて。男性陣は浄土ヶ浜の高台に車の移動をしてくれて、女性陣は中の重要書類を取りまとめして、私の車が来てそれに全部積み込んで、ちょっと揺れが大きいから、念のために避難しようかって話をしてたら、車を置いてきた社員から、宮古湾の水が引き始めていると。やばいぞということで、急きょみんなで避難しました。いちおう念のために戸締りだけはして行ったんですけどね。

私は街中のホテル沢田屋さんの並びの上に、新町店兼実家に避難して、あとのみんなは浄土ヶ浜高台に逃げたんですがね。1名の社員だけこちらの方に避難して来たので、山手づたいに気を付けて帰るように指示して帰しました。

後はだれも来ないのでみんながちゃんと逃げたかの確認と、県立宮古病院に、父が入院していて母が看護でいたので、従業員の安否の確認と様子を見に行こうと思って、ＮＴＴの前の道路を戻って来た時に、宮古漁協のマリンバンクのあたりか、塩屋さんあたりの間を、車で走っていたら、川沿いの防潮堤の向こうに、いつもだったら泊まっている船のアンテナしか見えないんですが、船がだんだんと上がってきてですね、ひっくり返って赤い船底を見せたまま、上流に流れてゆくのが見えたんですよね。

やばいと思って、無我夢中でアクセル踏んで、田老方面に上がって、高台の測候所の少し手前あたりで車を止めて、振り返りましたら、川沿いを水しぶきをたてて津波があがっていくのが見えた。津波っていうより水が上流に逆流するのが見えて。私が車で走っている時は津波は溢れなかったんですが、その後、すぐに溢れ出したりで、私も間一髪でした。反対側の道路の測候所の方から、鍬ヶ崎方面が見えるんですけど。宮冷さん（宮古製氷冷凍工場㈱）は高い建物なので見えたんですけど、私の見間違えでなければ、須藤水産さんが見えなくなったんですよ。

せっかく代替わりしたのに…、ああもう、これでもううちも終わったなって思いましたね。そこでしょぼくれててもしょうがないので、まずは安全確認だということで、国道45号から浄土ヶ浜に入って行く橋の方まで走って、蛸の浜の上に行きましたら、避難したけっこうな人数の人が橋の上に立って、海を見てんですよね。

私は地震があったんで、橋の継ぎ目とかもずれる可能性までも気を付けて運転して行ったんですよ。みなさんが止まってるんで何だべと思って降りたら、蛸の浜の水がすっかり引いてて。たぶん水深5、6㍍よりもっと深いと思うんですけど、そこがすっかり底が見えて、やばいなと思って、そっからケイタイでパシャパシャと撮って、すぐに移動して従業員を探したんですけど、見つけられなくて、そっから駐車場内ぐるっと見たんですが見つかんないために戻ってきて。蛸の浜の橋も高いから、大丈夫だと思ったけど、もし足元すくわれたら怖いなと思って。ただみなさんが一所懸命写真撮って、大変だ大変だって騒いでいました。

私はもう1回病院に戻って、親父が大丈夫だというのを確認して、後はおふくろにとりあえず、「ここにいなさい」って指示をして。そっから、次は食べ物がないなと向かいのローソンに行ったんです。

そしたらすごい行列になっていて、地震で停電になっていて、レジじゃなくて電卓でやってて、当面の飲み物と何かおなかの足しになるものと思って。カゴ2つも買いましたけど。でも、みなさんも同じような感じで、行ったらごはん類パン類は一切なくて、簡単な洋菓子だったりとか、お煎餅だとか、飲み物がまだありましたから、私が行ったときには。それを買うのに1時間以上かかりまして。

それを持ちながら、今度もう1回浄土ヶ浜の第三駐車場に行ったら、車に乗り合わせていた従業員に会ったんで、今後の指示をして食料と飲み物を半分分けして、半分は持って帰ってきて、その日の夜は私もそのまま病院に…。

私がはっきり見た津波は、測候所から鍬ヶ崎に来た津波で、どす黒いわけではなかったんですけどね、きれいなグリーンじゃなかったことは覚えています。とにかく見たこともない光景でした。

ただ、目の前で建物が見えなくなって、それこそふつう見る波じゃないんで、映画のような大きな波じゃないんですけど、とにかく大量の水ががーんと押し寄せて来るような感じで、建物が一気に呑み込まれたんだなあと思ってですね。

最初に経験したのは川を遡っていく津波、それからすぐ道路の反対側から測候所の下見たら、ざばーんと来て、たぶん同じ津波じゃないですかね。それから移動してから、蛸の浜のところがすっかり海の水が引いているんで、たぶんそれでもう1回ががーっと引いて、また来たんですね。

ここの本店も親父が建ててから19年ぐらいになるんですけど、太い鉄骨で建てましたんで。建物は残ったんですよ、壁は抜けて中は全部ぐじゃぐじゃでしたけれども。若い頃、写真の仕事をしたことがある

んでねえ、知っている方には「写真を撮れば良かったのに」って言われたんですけれどもねえ、その時はとてもそういう気持ちにはなれませんでした。

4　日の出町仮設団地

□　小林一二三さんの話

昭和19(1944)年生。鍬ヶ崎下町。元会社員。仮設住宅自治会長。

平成27(2015)年3月8日、日の出町仮設住宅で話をうかがった。

3月11日は、私は崎鍬ヶ崎で盆栽とか山野草をやってましてね。地震、あんまり揺れなかったんですよ。家内に電話しても全然通じないし、45号下ってきたら渋滞で行けなくて、旧道回って鍬ヶ崎小学校まで来たら、水が校庭まで上がってて、そこの大倉辰夫さんのクルマが流れて、1階まで浸水して。

「うちの家内も終わりだな」と。愕然として、そうしたら島崎電器の奥さんが「やあ大丈夫だから、奥さんはどこか避難してたんだから」って言われて。茫然自失で帰ったんです。

山（崎鍬ヶ崎）に行ったら家内が来てて、「よく来たな」って。そしたら部落の自治会の奥さんが、チャルメラ（即席ラーメン）5つ袋持ってきて、「ああ、なんとかこれで生きられるな」と。それから、臼木山（通称・サクラ山）に行って高台から鍬ヶ崎見たらね、「これ夢なんじゃないかな」って。何もないし、用事もないし、茫然自失。涙も出ないんですね。「本当なんだろうか」ってね。陸中丸がどんと陸上に上がってね。すごい惨状な訳ですけどねえ。有料道路の橋から何人かが飛び降り自殺してねえ、もう前途悲観してだったらしいんです。私は見てないですけどねえ。

もし仮に、私がすぐね、自宅に戻れば、私欲たかりだから、権利書だなんだってやっててね、母ちゃん逃げて、私の方が亡くなったんじゃあないかなあ。私がゆっくり構えてね、30分、40分で、もっと早く行けば、もうずっと下ってね。逆に先輩から、「おまえが亡くなったのかなあ」って。そういう意味では、家内の親戚が、「奥さんが無事でよかったなあ」と。

4年経つんですがまだ夢かなって、まだ消えないんですね。ただ、そういう惨状は見てるけど、現実として受け止められないというか、認めたくないっつんだか。自分にとっては自慢の家だったんですけども、借金して建てた。今70なんですけど。37歳で（建てた）。あとちょっとリフォームすればいいな、って時だったんですけども。

自分自身は津波の体験はしなかったんですけど、次の日に自分の町の惨状を見た時に、これ本当に夢かなって思って、そんな感じがして。それで、とりあえず山に避難したんです。

ところが、3晩目から物資が来なくて、何もないですね、支援というのが何もないし、避難している訳じゃないですから。そうしたら、避難している人は何でも貰えるんだっていう話ね。自分が山の小屋に住んで、下の自宅が流されて山の小屋に住んでいる、そういう人が何も貰えないっていうのは、おかしいんじゃないかって。

市役所に掛け合ったり、県に掛け合ったり、そいでもだめだって。県では赤十字に話しますけどって程度でね。「じゃあ、仮設に入っぺ」と。で、電話したら「7月11日で締め切ってます」と。「それどこで分かったんだ」って話。「広報で報告しています」っていう話でね。「広報なんて見てませんよ」っていう感じで。そうしたら「空いてました」ってありましたんで、「どこにお住まいになりたいんですか」っつうから、「崎山から鍬ヶ崎のあいだ」と。「上の方と相談してみます」っつう訳で。そいで「入居が決まりました」って。「申請書か何か出すのかな」って言ったら、「住宅課に来てください」って。

お陰で仮設に入って、4年になるんですけどね。なんとはなしに、自治会長なんつうものをさせられてですね。ここは一番新しい最後の仮設じゃないですか。私が8月の4日かな、ここに入ったのは。こういう仮設住宅に入った人たちが優遇されてね。住宅の下だけ流されて、電化製品全部流されて上に住んだりね、自分で仮設造ったり、そういう人が全然優遇されないって、すごく憤りを感じてね。市に行って交渉すんですけど、担当者は下向いて上向かなんですよ。どうしょうも

無いんですよね、あの人たちもね。

姉が来て貰えるって話なんですよね。で、市長にも話したんです。「不合理じゃないか」って。同じ災害なのに、たまたま(住宅の)下が流れて、たまたま上が空いてたんで住んでいる人、こういう人は何にも貰えない訳ですよね。だから、私は物資とかそういうのがあったんですけど、鍬ヶ崎小学校とか被災した人たち、そういう人たちは正常な神経じゃないから、「おめえたちは関係ない」とか「おめえら来っとこじゃない」って。

こんどは90人いたのが、弁当が２００くらいになったんです。こんどは関係ない人、被災しない人、そういう人も恩恵に被っていたった訳ですよ。行政は何も言わなかったんです。でも周囲からいろいろあってから、罹災証明書を提示しなければ…。実際被害に遭ってる人が恩恵を被ることができなくて。仮設に入ったら何でもある、テレビ・ラジオから冷蔵庫からね、目覚まし（時計）から爪切りから歯ブラシから屑物入れ、全部一式ですもの。米が10キロね。今回の災害を通じて、行政も大変なんだろうけれども、何回も話をして。

鍬ヶ崎小学校は避難所なんですけど、生徒はみんな熊野神社に避難したんです、あの高台に。校庭はもう浸水してますから。私が行った時には屋上にも人がいましたね。3・11以前に、3月に避難訓練をやるんですよね。そいで私も会長やってたもんですから、避難訓練やって。

津波が3メートル来るって話で、ある方がたいそう憤慨したったんです。3メートルだって、嘘ついたって、気象庁はすべったの転んだのって。その人が自転車で海さ行ったらしいんですよ、3・11の時、津波さ見に。そいで、ようやく屋根伝わって助かったんですけど。もし死んでたら物笑いですものね。すごく怒ってやったんです。いわゆるてんでんこってやつですけど、ただ逃げると。常に夫婦でも子どもらでも話して、どこさ逃げてどこさ連絡取れるとこさ、逃げろとね、これが鉄則じゃないかなあと。

むかし、子どもの頃は私、海のそばだったんで見さ行ったですものねえ、津波って言えば。ざーっと水が引いてってね、また逃げたりして、それだけ大きい津波は来なかったんですけど。小さい頃、宮古港に死体がこう重なって、なに津波だったかの記憶にはないんですけども、そういう記憶はあるんです。

避難訓練のときはサイレンが鳴って、鍬ヶ崎小学校に行って、まず町内何人参加したって、うちの方の町内は町内で、それを自治体、行政の担当者が来て、それでうちの方は何名、何名って。その時に、いの一番に避難してきた人が、犠牲になったんですよね、3・11でご夫婦が。

鍬ヶ崎小学校のそばですからね。私の盆栽仲間の先輩も顔を出すけどねえ、「防潮堤越えて津波が来ない」って夫婦で見てたったらしいんです。「何でみんな逃げんだべなあ」ってね。清水川を上がって来たと思うんですよね、鍬ヶ崎小学校まで津波が来るって、私も想定しませんものね。

昔っからというか、先人っつうかね、蛸の浜を越える津波が来れば、鍬ヶ崎は終わりだって、言ってるもんでしたもんね。あれは越えないもんだっていう認識ですものね。それが越えたから、（宮古湾と蛸の浜の）両方ね。私の親戚も安心してたから。裸足で逃げたって、今、助かってここにいっけどね。天災っていうのは想像がつかない、そういうもんかねえ。

□ 田中登世子さんの話

昭和18（1943）年生。鍬ヶ崎。主婦。平成27（2015）年3月13日、鍬ヶ崎小学校（グラウンド）仮設住宅で5名の方から話をうかがった。

私はその日の午前中は、漁協の地区別研修があって、藤原でみなさんと会って、勉強会をして。思うより早く終わったんですよ。そのまま車で自宅まで来て。家の近くで、また明日のことを相談しながら、家さ帰って行ったのが2時なんですよ。

少し疲れたから寝て、その時に地震が来たんですよ。大っきな地震が来て、たまげて1回は出たんですけど、昔のことであっても地震が

きたらば、戸を開けてガスを止めるっていうのも頭にあったから、それをして、いったん家さ入って。お父さんが台所見たっけ、もう台所もはっちゃかめっちゃかなってたからって。

それよりまた大っきなのが揺れたんですよね。お父さんが「これはとんでもないから、大っきいのが来ると思う、だから逃げろ、逃げろ」って。お父さんが小屋に行って準備してきて、私も寒いからって、2階さ上がってって着替えをして。3日ぐらい前に避難訓練がありましたよね、持ってく物は準備してあったから、リュックサックを背負って。みんな出はって来て。近所の人たちを「津波が来っから、早く出はって、出はって」って呼びながら。みんな出はって来たんですよ。

隣近所はいなかったけど、向かいにいたったので「出はれ」ってゆったがその人は、出たり入ったりばっかりして。「何してんの」っつったの。「ホトケさま持ってかねばなんない」、昔の人たちはホトケさま持って出はるだってね。私はさっと入れたから。初めて入れたの、そのホトケさまを。

大っきな地震で怖かったけど、広いとこさみんなを呼んで、年寄りとかいったんここで落ち着いて、「地震さ収まったら、また行くべし」って、学校のプールの前まで来たんですよ。

今考えれば、津波というのをあんまり知らなかったから、だから、ここにいては海が見えない、津波ってどういう風に来んだか、そういう気持ちで上さ上がったんですよね、オクマンサマ（熊野神社）にね。上がって5分もしないうちに、向こう見たら、向こうからもう波が。波っていうより、冷凍庫の氷作る所、あそこの所がだんだん水が増してくるんですよ。そして、こっちから、船が4艘か5艘、それもいっしょに流れて来たの。

そうしてるうちに、竜神さまの出崎の所から波が越えて来て、大っきい波だったけど、きれーな波でした。きれいな水色、それが越えて来て、そしてどんどん来て、そしてるうちに、「家が流されるー」って見て。見てるうちに、今度はこっちでゴーゴー、ゴーゴーすごい音がするんですよ、こっち側でね。黒い煙が上がったりして。そして見てたったけども、私は怖くて見られなくて、しゃがんでしまったたけど。

今思えば、70になんだけど、何年も津波っつうのは聞いてますよね。避難というのもいつも聞いてるんです。でも、大したことないと思って。今までは準備はしても逃げたことない。そんな気持ちだったから。今回も来ないんじゃないかなっつう気持ちだったから。あれが間違いです。今は地震が来て、津波が来るったら、さっと逃げる…。

私たちが熊野神社に上がった時は、鍬ヶ崎小学校の子どもたちも上に上がっていて、誰も泣かないで静かに黙ってしゃがんでました。うちの孫がちょうどそん時は5年生（女子）だったから、孫がいたかと思って先に見て。大丈夫で。「ここに婆ちゃんと見たから」ということで、最後孫たちも婆ちゃんと爺ちゃんしかいなかったから、連れて帰って来たけど。

その後は、家ごとになって、「学校で毛布とか用意してるから」って言うから、うちの近所の人たちがそこにいたから、「じゃ、いっしょの行動しよう」って、いっしょに連れて来たんですよ。学校の2階に入って。私は9時頃かな。息子が消防に行ってるためで。息子はその日はいなかったから、夜探しに来てくれて。

それから息子たちは、日の出にいるから、車そこまで持って来たから、「行くべし」っていうことで、私ら3人乗せられて、息子たちの家さ行って。「消防出て行かねばなんねえから」って。私ら3人で丸くなって。地震も来るし、孫は「怖い、怖い」って泣きもしないけどね、我慢して我慢して。

今、4年生の子どもはしゃべっても大して感じないんですよ。大っきいのは、今、受験だ何だってやるものいっぺえだから、後でゆっくり聞かなきゃなんないなあって。

「あの晩げはなあ、ほんとに星がきれいで、すごかったよなあ」って、空見たらすんごく星がきれいで、「見て見て」って。「こんな震災が来るという時は、こういうきれいな星が出るんだってよう」って教えて。孫は怖いから寝ないけどね。

朝になった時に、「家を見に行こう」って、測候所の方まで連れて来

て、「怖くて、行かない、行かない」って言ったけど。「これはね、2度と来るもんでもないし、2度と見るもんでもないから、目に焼き付けなきゃだめなんだから」って、無理やり連れて来て、「あそこが婆ちゃんの家だよ」って、みんな見せて教えて、そして帰って来たんですよ。

お母さん（お嫁さん）だの小ちゃい子どもたちは、実家は茂市だから、仕事場が向うだから、向こうさ行って。次の日は、やっと来たって。日の出に来たんですよね、子どもがいるから。そうしたら、その孫が今まで泣かなかったのがお母さん見たら、とっさにわっーと泣き出したんです。それまで全然泣かなかったのね。初めて泣いて。

だから、忘れられないんですけども。それでも、命を落とさなかったけど、津波に対して考えがちょっと甘かったなあと、今思えば。息子家族と4か月ぐらい仮設ができるまで、いっしょにいました。

□ 大澤ヨシさんの話

…年生（公表せず）。蛸の浜町。主婦。

あの日は、私はね、パーマ屋さんに行ったんですよ。そして、11時半ぐらいかな、帰って来たのが。その時にパーマ屋さんでね、津波の話してたったの。「津波が来る、来るって言ってっけど、いつ来るのかねえ」ってねえ。「とにかく、来るんだったら、逃げれるんだったらいいけどねえ、どうなんのかねえ」ってね、そんな話して。「やあ、こればっかりは、分からないからねえ」「今日来んだか、明日来んだか、やったがねえ」っつう話しちゃったの。

帰って来て、3時間ぐらいしたらね、今までにねえ揺れ方だったから、父さんがちょうどいたったから、「こりゃあ、早く逃げねばだめだぞー」って。とにかく、父さんがいなかったらば、どうなったかちょっとわかんないけどね。「早く、出ろ、出ろ」って言われたって、何かを持ってかねばっていう気持ちになってっから。

9日の日も大っきい地震があったったからね。その前からだけど、準備はしてたったから。もし万が一の場合は、これを持って逃げるっていうのをね。それを出すにねえ、もどかしいって言うんだかね、一所懸命やってんだども、はかどんなくてね。父さんは外から騒ぐ、「早く、来い」って。ようやくそれ出したんです。お勝手とかそっちのね、茶の間の方は全然どうなってっか、音はすごかったから。見る暇なく外に出たんです。

それから、「早く、車に乗れ」って言われて、車で小学校まで来た訳だ。その時は、あんまり人も出てなかったしね。ここに来ればもう安心だなあっていう気持ちでね、小学校の体育館の入り口んとこにいたらば、いいなと思ったら、「だめだ」って。「こんなとこにいたらだめだ、早く高いとこへ」って、消防の人たちに騒がれてね。

高台に行ったけど、普段あんまり運動しねえからね、どっから呼吸してっかわかんねえ訳、こっちの胸が。後は足と腿もね、動かなくて。それでも、がんばってがんばって。とにかく自分のだけでなくね、近所の人がお婆さん連れて荷物持ってたったからね、その人のもね、持って上がったはいいが、自分が動けなくて、それでもがんばってがんばって、ようよう上がったんです。

そしたら、そのお婆さん連れてた人が来ねえ訳。下の方にいたって言うんだけども、水かぶったんだっけどもね。あの時は生きた心地がしなかったねえ。これから先どうなんだかって、全然頭にねえ訳だ、ぼーっとしてね。何日かそうやってね、どっかが抜けたような感じだったからね。

下を見れば、すぐそこまで水が来てっぺしね。そうしてるうちに今度は、すぐそこの父さんだどもね、すっかり濡れて上がって来た人がいたんです。そうしたら、流されて来たんだって。蛸の浜から流されて、ようやく上がって来たって。熊野神社さ上がって来たったもんね。その人（カネコさん）は今、元気でいますけども。

団地さ上がってたら、どっこの家も暗いから、とにかく行ってトントンったらば、玄関に物がある訳。「何だ、どこさ行くどこか」ったら、「逃げっとこだ」っつう訳だ、中里団地でね。「何、ここまでは津波来ねえんだから」って。その晩はそこの家で泊めてもらって。電気も無えば、ストーブも無えば。だから、食べんのもねえ。ガスはあったから、ガ

スでインスタントラーメンごっそうになって。

それから、4日か5日ぐらいいたんだね。そうして小学校に来て、3階だったかね、あすこに1か月ぐらいいて。そして、体育館の床を取り替えて、市役所の人たちがいい塩梅にやってくれて。そこさ今度引っ越しだって。それから3か月ぐらいいたのかな。ここ（仮設）ができるまでね。

ここに来たらば、こうしてみんなと話ししてっ時は、忘れるって言うか。家にいると、何となく思い出すこともあっからね。

同じ境遇にあった人たちと話ししてっ時はいいけど。家が流されなかったっていう人たちは、ちょっとやっぱり違うもんね。なんぼ「ああ、そうだよねえ」「ほんとに、かわいそうだったがねえ」「大変んだったがねえ」っても、やっぱり違う。長い間にねえ。そういうのはほんとに感じますよ。

家は押されてって、熊野神社のちょっと下まで行ってらったね。傾いて、家建てて18年目だったから。下は全然抜けてって、他の車とか何かが何台も入って、バイクとか入って。2階は斜めになってるしね、自衛隊が来て、何かやるようになってから出て来たのが、留袖、喪服とか、みんな泥んこになってね。全然持って来るような状態でなかったしね。自分が欲しかったなあと思うのも無かった訳。ああいうのは誰も持ってかねえことだども。その後にね、洗濯屋さんが来た時に、私の気に入ってたったブラウスがあったの。そうしたら、そのブラウスが洗濯屋さんに掛かってんの。孫が来た時ね、「あらっ、これっ、おれのブラウスだ」って言ったの。そしたら、洗濯屋さんも誰が頼んだって言わなかったもんね。

拾って歩った人たちなんだよね。けっこうそういうのがあったからね。行くっていうと、これは持って来てえなあと思っても、置くとこが無かったから。でも、次の日行けば無くなってんの、みんな。漬物の重石、こんな石、あんなのも無くなんだもの。泥棒が流行ったんだね。こっちの不幸に付け込んだ泥棒、許せねえなあと思ってね。ああいうのは、もうたくさんですね。

□ **佐々木光子さんの話**

昭和24（1949）年生。鍬ヶ崎・港町。主婦。

私は港町の自宅で、お茶っこ飲みしてました。大っきな揺れでたまげて、いちおう外に出て。また地震が来たから、たぶん今度は津波が来んでねえかなあって思って、いちおう着替えして、そして荷物を持って、車でターミナル（浄土ヶ浜ターミナルビル）に行きました。ちょうどいかったの、そん時はお父さんいたから。津波を見んのがおっかなくて車の中にいました。だから、私は津波は全然見ません。私はお父さんとその弟と、姉、姉の子ども、きょうだい、甥っ子の5人で、二中に避難して、2週間いました。そして娘は、北海道の札幌にいたもんで、連絡があって、そして「こっちさ来て」って言うから行って、3か月お世話になって来ました。そして夫と2人で、向こうで3食食べて、…生活やって来ました。私は妹の所（藤原）に、今度は1か月ぐらいお世話になって。そして、ここ（仮設）が決まって、それからずっといます。みなさんと同じ時期が過ぎました。

□ **加倉しづ子さん**

昭和24（1952）年生。鍬ヶ崎（現在、佐原在住）。主婦。

あん時は、私はちょうどお勝手にいたったんですよ。地震が起きるほんのちょっと前に、お客さんが来たんですよ。「今この辺やってて、終わったから、ほんじゃあ、先に入って休んでて」って言って、座ろうか、座らないかっつうあたりに揺れたんですよ。「おうっ地震だ」って。普通の揺れじゃなかったから、おばちゃんがちゃっと立って、外に出ようとしたんですよ。

家はオクマンサマ（熊野神社）の鳥居のとこなんですよ。だから、「ここは昔、海で岩盤ががっちりしてるから、ここまで来るったら大変だし、どんな揺れが来てもここは物が落ったり何だりすっことないから、大丈夫だあ」って、のんきに構えて「座ってろ、座ってろ」って言ったんですよ。「うん、そうか」って、おばちゃんも座りかけたんですけども。もう尋常な揺れじゃなくて、揺れて揺れて、これでもかあ、これでも

かあっつうぐらい、すごい揺れなんですよ。

けっこう学校がすぐ近くだから、人の声がするから、「おばちゃん、津波はここまで来ないから、1回出てみるか」って言ったけど、おばちゃんは「1回、家に帰る」って言ったんですよ。「ほんじゃ、おばちゃん、(路地、路地と歩かなければならないから)帰るってもかえって危ないから、表の方へ行ってね」って、おばちゃん帰して、私はそのまま、着の身着のままで上にも羽織んないで、ちょこってその辺さ出はってみっか、ほんじゃって気持ちで出たんですよ。

プールの横にいて、花壇みたいになってるとこ、寄り掛かるようにしたんだけど。「まだ余震が続いているよ」「土がここ揺れてるよ」ってるうちに、大津波警報が出はったんですよ。「3メートルぐらい」って言ったんで。「なーに、3メートルなら、ここまで来ねえべしかな」ってのんきに構えてて。それでも、次から次へと避難用のリュック背負ったりとか、だいじな物を持ったりした人が来て。

近所の人も「なーに、ここまで来るったら容易なもんでないよ」ってるうちに、「第1波が来た」って言って、そん時は少なかったんですよ。「ほらな、ここまで来るったら、大変なことだから」って言ってるうちに、学校の生徒を引率した先生などが来て、「そちらさんたちは、ほんとにここでいいんですか、大津波警報出ましたよ、私たちは生徒全員引率して、高台に上がりますよ、ほんとにいいんですか」って、念を押してったんですよ。

だども、「なーに、あれだな」ってるうちに、寒くもなってきたから、そんじゃあ、いったん家に帰って、トイレさ寄って、そしてから羽織って。何かを持ち出すっつうのは、頭になかったんですよ。

高台に上がって、あらっ何かあの辺の台船だか何だかが、揺れてるような気がすんだねえ。白い泡みたいなのがこう帯状になったんですよ。あれっあんなのは何なんだべねえって感じ。それでもまだ津波が来るっつう頭は無いんですよ。そしてるうちに、その台船がどっかに行ったり何だりしてるうちに、そして、辺りをきょろきょろしてたらば、観光船が目の前にどんとあったんですよ。観光船が流れて来て、学校の門の辺りまで道路沿いに上がって来たんですって、上から見てる人たちの話を聞くと。そういうの見てないから、引き波でそこさどんと落ち着いたのしか見てないから、何で観光船があんなとこにあんのうっつう…。それでも他人事。わあっ、テレビで見るような感じだがねっつう、高みの見物、まさかこういうことになるとは思わないから。

そうしてるうちに、「あやっ、何かおかしいねえ」、こちらの家とも1軒の間に、ちょっと隙間が見えるんですよ、そしたらそこの間をマークツーみたいな乗用車が、バックで吸い込まれて行くんですよ。子どもたちがタライに船を浮かべてぷかぷかって感じで。「あれっ、あそこ水温上がってんのかなあ、何か車ばっかが吸い込まれて行くよう」「あやっ、ほんじゃあ、乗ってるあれなんだべかねえ」って。それでもまだ、思わないんですよ、そういう頭がないから。

「おかしいなあ」って言ってるうちに、今度はそこにお酒造る菱屋ってありますよね。あそこの煙突だと思うんですけども、あれがこけたんですよ。「あれっ、煙突がこけた」、そしたらあの辺まで来たの。そしたら、家の車だめかなあっつう感じなんですよ。それでも頭は狂ってる感じなんですよ。

間もなくドミノ倒し、ベキベキ、バリバリ、バリバリっつう感じで、ものすごい真っ黒な砂煙。オクマンサマを上がったとこからは、波っつうのはいっさい見えない訳、家の目線で。遠くの波の陰で光って。そんだから、「えっ、そしたらそこまで来てんのう、えっそんじゃ、家まで来んじゃないの、そこで止まってちょうだい」ってるに、さあーっと流れて、そして私の目の前に、1軒すごく立派な家があったんですよ、そこの2階がきれいに、学校のあっちの降り口に、すとーんとはまったんですよ。

波がさあーと行って、家は無くなって、ああ終わったっつう感じだったんですよ。そして、お父さんと2人で上がってらったから、子どもたちは仕事だから、そして大っきい息子から電話がお父さんに入って、それっきり通じなくなってんですよ。2番目は、盛岡に仕事場を持ってらったんですよ。私は盛岡だから小ちゃい息子は大丈夫だなって、

息子から電話が入るってことは、電話が通じたから大丈夫だなっつうことで。

お父さんと私は、「寒っぷいなあ」って、雪がちらついてきちゃったから。オクマンサマの境内でドラム缶に火焚いてらったから、「ほんじゃ、ここで夜を過ごすしかないねえ」、それでも「小学校さ行って見るすか」って。毛布も、何にもなくって。「しょうがねえ、どうせ行ったって、横になれねえし、ここにいっぺし」って。そしたら、佐原にいる弟がこの橋を通って来て、お墓の方通って来て、迎えに来てくれたったんですよ。

それで、お蔭さんで私たちは弟のとこへ、その夜から、電気も消えてらったけど、嫁さんはテーブルのガスコンロで、「うまく炊けないこったけど、おかゆでもいんだっけ、まあ食べてべし」って、あったかいご飯を用意してくれて。そして、弟はイカ釣りの時期だったから、バッテリーを充電してあったんですよ。そのお陰で、電気もつけて、暗い思いもしないで、ストーブは反射板もあるから、あったかいとこであったかいご飯を食べて。その日から22日間、弟んとこに世話になって。

そしてるうちね、小っちゃい息子が帰って来たんですよ。まさかそんなになってると思わないから、事故か何かで渋滞してんのかなあと思って。何とかかんとか来て、そして裁判所辺りまで来ましたって。そしたらば、「どこさ行く」ったっけば、「鍬ヶ崎さ行く」ったっけ。「全面的に交通ストップで、行く手段も無いからだめだ」って言われたと。んだども、「おれには親がいっから、何どしても行かねばなんねえ」って、警察とやり合って無理くり、自分は山口川の方に行って。常安寺に水があったけど、無理くり上がって来ちゃって。そして、常安寺を越えて、こっちゃあと思って1回見たけどだめだなあと思って、弟のとこに来ちゃったんですよ。「ああ、いかった、いかった、父やんも母やんもいた、おれもこうして来た」って、帰って来ちゃったんですよ。

そして次の日、大っきいの（息子）藤原方面から歩いて来たんですって。歩いて行けば何とかなっからと思って。そして、市役所の前まで来てびっくりしたんですって。わあーっと思って。市役所からこっちは全面的に瓦礫とかで、道路っつう道路が無いから。これは大変だ、どこをどう行けばいんだべえと思って。でも、ここまで来たんだもの、諦めたらだめだって。

上ったり、下がったり、滑ったり、転んだりしながら、「なあど」を目掛けて来たんですって。そっから今度はとってもじゃない、何とかかんとか、そうしてるうちに、オクマンサマに着いたんですよ。私たちのいる所に。歩いてけっこうかかったって。そういう状態だったんです。

そして、22日間、弟のとこにお世話になって。息子が会社の関連のアパートが、1部屋空いたっつうことで、おっかねえから生まれた里に帰る人があって。寒かったけど、1部屋だけども借りられて。ここに来るまでそこにいたんですよ。

ベニヤ工場もすぐ稼ぐに良かったんですよ、そういう状態だったから、直して。大っきいのは1か月ちょとぐらいで、仕事に復帰できたし、今ここに小ちゃいのはいっしょにいるんですけども、それは鉄筋屋だから、忙しくなる時期だから。仕事が入ったんですよ。そして、お父さんと2人、その小ちゃい子とここにいたんですけども、お父さんも息苦しいから、自転車があったから、自転車をこいで自分は毎日、鍬ヶ崎に来るんですよ。

そしたら、そこの部屋に1人だけ残されて、周りを見たら瓦礫だらけで、ちょっとおかしくなったんですよ、私の方が。ごはんは食べさせなきゃなんないし。一時期お金があっても物を買えない時だったから。それでも、子どもたちの友だちが野菜でも果物でもみんな持って来てくれたったから、実際何にも困んなかったんですよ。炬燵から何から全部、子どもたちの友だちが持って来てくれて、何一つ買わないで普通の生活ができる状態だったんですけども、そういう風に物が無い、そして出はった人たちはみんな帰ってくれば、ご飯ができてるもんだと思って。米なんかはいっぱい貰って、溢れるぐらいだったから。そいでもおかずになる物が無い。

ぱくっとガスコンロが一つ、短大生向きだから。そんなの考えたら

ね、おかしくなって。これじゃあだめだと思っているうちに、愚痴を言ってしまったんですよ。そしたら、息子に「ほんだら、お母さんも車出して、好きなとこ行けばいい」って言われたったんですよ。そん時、はっと思って。あっこれは、私まずいこと言ったんだなあと思って。みんなが一所懸命稼いでる中とかで。

それから、その辺を歩くことにしたんですよ。ホーマックとか、河南中学校の方に行ったりとか。そうするしかなかったんですよ。そうすっと、年寄り見つけて「私、津波難民でこうして、あれしてるんだけども」とかって自分から話し掛けて、「いやいや、それは難儀だったねえ、そんじゃあ、おらは何にもできねえけども、おらあここ下りて行ったところのすぐそばだから、お茶っこぐらい入れっことができっから、休んでがんせ」って、そうしゃべられるだけで、心が和んで、ねえ。そうして、わあーと思って。

そしたっけ、息子が今度は「ほんじゃ、お母さん、これでもやってって」ってね。自分もなかなか仕事だ何だりで買いにさ行けなくって。たまたま事務の人が宮古に行くったらば、頼んで買って来てもらってくれたりとかって。そしてからも、今もずーっとね、パズルは買って来てくれてるんですよ。そういう状態で落ち着いて、ここに来ました。

□ 田中ユリさんの話

…年生（公表せず）。鍬ヶ崎・港町。主婦。

田老生まれです。昭和の大津波は、4歳の時に体験しました。こんだの地震の時には、家にいたったんです。息子と2人で住んでんだから。息子はちょっと浜の方さ行っちゃって。それで地震が来たために、戸を開けて、ガスの元栓止めて、裸足で外に出はったの、地震が来たからっていうことで。そして震えってたの、外で。そうしたら息子が来て、「母ちゃん、寒いけど津波が来るけど、いいとこある」って言って。普段リュックサックさだいじな物入れて枕元さ置いてんの。仏さまを風呂敷に包んで、手提げさ入れて、学校さ来るつもりで来たの。

そうしたら学校の入り口んとこで、年寄りの男の人が、「学校はだめだから、オクマンサマさ逃げろ」って言ってね。オクマンサマへ、そいからこんだ、来る途中、おれの息子は隣近所に、「津波来っから、逃げろー」って声掛けて。そいだから遅くなった訳だねえ。

鍵を開けてストーブさ火を入れて、そうして避難する人たちの座布団入れて、オクマンサマの窓開けて見たのね。そうしたら、市場の方がみごとに引けて行くのが見えた訳だ。引いてったがなと思ったら、今度は大っきいなのが来る訳。そうしたら、市場のヨコダ（魚を入れるカゴ）だとか、そういうのが流れて行くのねす。

そうしてるうちに、こんだ家の屋根が流れて来るの、こっちの方向へ。「おらが家の屋根でないべえか」ってしゃべっことして。それを見てたの。そうしたら今度は、蛸の浜の日和山の方から、こう波が来る訳だべし。あすこでこんだ、渦巻きになってね。波がこっちから来んのと、蛸の浜から来んのと、渦巻きになって。

そうして、そこさ避難した人たちも来て。そしたら、ここではおっかない状態でもう少し上がってって。今度は神さまのとこさ上がって。そのうちに、小学校の生徒が上がって来た訳だね。そして少し落ち着いてきたので、こんだ蛸の浜の親戚がいたの、津波に遭わない人たちがね。そうしたら、その人がねす、灯油を持って来たったの、神さまのとこさ。そうして2回も3回も来てたったの。蛸の浜の親戚の家行ったら、別な人と孫2人とお婆さんと、私の5人、お世話になったの、その家で。電気も来ない時期でしたべ。湯たんぽさ、お湯沸かして2つ3つ炬燵さ入れて、そこに足を入れてあっためて、ロウソクを立てて。

そしたら、心公院（寺院）からもロウソクがまわってねす、貰ったんだねす。こんだリュックサックさ、ペットボトルを入れて、心公院の裏山を2つ3つ越えて、山のヒラマツっつう沢から、水を汲んできた。水が全然無かったからねす。そして雪が降った時には、トヨさバケツを置いて、それに水がだらだらなったら、こんだ風呂場さ入れて。トイレさも入れて。そこの家に5か月お世話になりましたから。

そいで、おらの息子はオクマンサマさ泊まってらったもんね。「母さん、まだ忙しいなあ、まだ見られねえなあ」って言ったったども。自

分で屋敷のとこ、ちょっとわかんなかったっつったもん。どこがどうだかわかんなかったみたいで。そしたら、屋敷の角んとこさねす、ハマユリっつう、花咲いたったの。ターミナルかどっかから飛んできたんだか、その根があったたの。それを目当てに、自分の家だっつうのわかったった訳だのす。

そこさ行ったら、その時に涙が出たっだあねす。その前は全然涙は出なかったったども。その時にそこさ行った時に、涙が出て何ともやれないような感じだったね。そして、行くにも来るにも、自分の屋敷さ行くには、道路もわかんなかったもの。

その時に私を退屈させないように、ほどきものをさせたり、畑の草取りをさせられたり。お蔭さんでね、長居しちゃったの。今でもそこでお世話になっております。

鍬ヶ崎では菱屋さんの水を汲んだみたいですね。後はそこの日影(町)のね、坂上って左のとこね。カズヤの屋敷の下のとこんにね、後はそこの日影（町）のね、坂上って左のとこね。カズヤの屋敷の下のとこんにね。あそこにあったみたいだっけ。けっこうみんなは沢水でね、助かったんだよねえ。

鍬ヶ崎界隈では、「菱屋の水」は「命の水」であったと伝えられています。

（田中登世子さん談）